

語頭の母音字省略について

— ボッカッチョ *Il Filostrato* を資料として —

西村政人

I. はじめに

母音字省略という言語現象がある。母音字で始まる語の前に置かれた語の語末母音を省略し、省略記号で表すことである。冠詞と母音字で始まる語の場合、*l'albero* というようになる。ボッカッチョ *Il Filostrato* (以下 *Filostrato*) では *e 'l viso, se 'l mio servir* のような分離した形が現れる。これは前の母音の影響で *il* の母音 *i* が省略されている。これは冠詞だけでなく他の語の場合にも見られる現象である。本論文の目的は、*Filostrato* を資料として、この作品に現れるこの現象を調査して、ボッカッチョ文体の特徴に言及することである。

II. イタリア詩の韻律

作品 *Filostrato* は韻文である。今回の問題を考える上でイタリア詩の韻律についても触れておきたい。そこで例をあげて本作品の韻律について述べる。*Filostrato* は8詩句からなり、10音綴目に強勢が置かれる11音綴詩句である。次の例を見られたい。

Alcun di Giove sogliono il favore (Parte Prima 1)

この詩句は次のように11音綴りから成り立っている。

Alcun di Giove sogliono il favore
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

Sogliono の語末音 *o* と後続の *il* は母音が連続するのでこれで一音綴と数えられる。これがこの作品の韻律の基礎となる。8詩句の脚韻は *ABABABCC* の型をとる。脚韻語はすべて女性韻をとる。つまり最後に弱音節が付け加えられている。

III. 定冠詞と前置詞の事例

定冠詞 *il* の例を見てみる。この *il* の *i* が省略されている用例は236例、省略されない *il* の形は566例ある。省略された形が半分ほど使用されているのがわかる。それでは

'l の形はどのような語と共起しているのでしょうか。その傾向をまとめたのが次の表¹である。

e 'l	78	che 'l	53	se 'l	24
io 'l	9	tu 'l	6	come 'l	3
ma 'l	3	fia 'l	2	fu 'l	2
ché 'l	2	chi 'l	2	né 'l	2
più 'l	2				

上の表からわかるように e, che, se との共起が多いことがわかる。他に di', fa, m'ha, ne, sia, rea, lui, fra, o, giù, di, lei, è, s'ho, te, dà, sé + 'l も 1 例ずつ現れる。辞書の記述では接続詞 e については詩において il, lo の前で e'l になるとある。ここで挙げた例はさらに e と 'l が分離している。表から明らかのように、接続詞 e だけでなく直前の語が他の語でもこの現象が起こっている。これらは一音節であり、母音が衝突するのを避けるための措置であることは周知の事実である。二音節以上の語でも数は少ないがこの現象が現れる。

perciocché, infra, contra, tutto, bassò + 'l	各 2 例
dirà, finì, costei, lasica, tanto, così, raffocò, quaggiù, saprà, fosse, l'asciugò, lascerò, dicea, fuggi, ingannò fuggiva, l'avrà, cioè, invidia, ricomincio, saria + 'l	各 1 例

次に前置詞 in について実例を見てみると in の形が 387 例、'n の形は 81 例現れる。それらをまとめたのが下の表である。

e 'n	27	che 'n	22	sara 'n	3
te 'n	3	fu 'n	2	più 'n	2
se 'n	1	sta 'n	1	così 'n	1
fé 'n	1	sia 'n	1	mai 'n	1
ho 'n	1	saprà 'n	1	tu 'n	1
lasciai 'n	1	Troiani 'n	1	durerà	1
porrà 'n	1	lei 'n	1	poi 'n	1
sé 'n	1	ma 'n	1	me 'n	1

su 'n	1	ché 'n	1	avrà 'n	1
perché 'n	1				

前置詞 in と共起する語は定冠詞の場合と似ている。しかし定冠詞と比較すると頻度は少ないものの多岐にわたっている。それらは一音節語が主であるが、二音節以上の語も少しある。

IV. i-で始まる語の実例

定冠詞と前置詞以外に i-で始まる語にも同じような現象が現れている。それをまとめたものが下の表である。

'ncendo	1	'ncerto	1	'ncesa	1
'ncontro	4	'ncrebbe	2	'crescati	1
'ncresce	1	'ncrescerebbe	2	'ndebitamente	1
'ndugiarmi	1	'nferno	2	'nfiammati	1
'nfiammato	1	'nfino	1	'nganni	1
'nganno	4	'ngegni	1	'ngegno	3
'nnamorata	1	'nnamorato	1	'nnanzi	1
'nretito	1	'nsieme	5	'ntelletto	1
'ntendesse	1	'ntendo	3	'ntento	1
'ntenzion	1	'nterne	1	'ntorno	2
'ntra	1	'nvano	1	'nvece	1
'nvilito	1	'nvitava	1	'scoltarti	1
'scoltato	1	'maginazioni	1	'mpedita	2
'mpetrassi	1	'mpetrato	1	'mpresa	1

これらの直前の語は定冠詞と前置詞の場合と同じく一音節の語、言い換えれば短い語がほとんどである。ところが上の表で斜字体になった語では i が省略されていない例もある。それらがどのような環境で使われているかを調査した。直前の語が母音で終わる環境で現われるかに関して次の結果を得た。

語	総数	直前の語が母音で終わる用例数とその語
incendo	1	1 tutto

incesa	1	0	
incontro	4	3	Amore, Greci, seppe
inferno	2	0	
infiammati	1	1	ora
infino	8	5	sono, ho, fatta, ma, accompagna
inganni	2	2	tali, occulti
inganno	1	1	ne
ingegno	6	5	diverso, mio, ogni, altro, sottile
innamorata	4	3	deggio, l'anima, uomo
innanzi	6	5	mostra, lei, vogli, gitti, quale
insieme	21	18	bene, composto, volte, basciavano rassicurati, prendieno, camera, scrivendosi quivi, fatto, forte, n'andiamo, pianto facemmo, tenne, più, quindi, volte
intelletto	1	1	ogni
intendo	8	6	vedere, morire, costei, bene(2), essere
intenzion	1	1	tue
intorno	5	4	sereno, piacere, bene, animo
intra	4	1	te
invano	4	3	adopera, cinguettare, risposta
impedita	1	1	l'avrebbe
impresa	2	2	vostra, quella

同じ i-で始まる語であっても、省略される場合もあり、そうでない場合もあり揺れていることが判明した。母音字省略が起こる場合は直前の語が短音節が多い。多音節になると上の例でわかるように母音省略が生じていない。これは音韻論上の理由に加えて、聴衆に詩を聞かせる観点も考慮すると、長い語同士ではまとめて読みづらく、聴衆が耳で聞いて理解する妨げになるからである。

V. 用例の分析

これまで得た用例からなぜこのような現象があるのかを考えてみたい。まず第一に写本の点から考察してみたい。メディチ家図書館(Biblioteca Medicea Laurenziana)にて *Filostrato* の写本 Pluteo 41.28 を筆者は調査した²。これは Branca (1990) の

テキストにて参照された写本のひとつである。この写本では文字 *i* は点 (*punto*) も含めてはつきり読み取れるように書かれていた。しかし *i* が省略されていると判断できる例も確認できた。たとえば *Parte Prima 2* では *e 'l mio conforto* では *il* の *i* は書かれていなかった。*Parte Prima 3* の *la mia 'mpressa* 同じく *Parte Prima 4* の *ingegno* でも *i* は確認できなかった。もちろん省略記号などもなかった。ところが *Parte Prima 6* の *'l mio verso* では明らかに *i* が書かれていた。しかし点 (*punto*) はなかった。つまりこの写本から判断すると、*i-* で始まる語には *i* が書かれているのと書かれていない形があることが存在していたと言える。声に出してこの詩が読まれた時、ふたつの異なった読み方があったと考えられる。ただ筆者のこの写本の調査では *i* ははつきりと読み取れる語が全体に多かった。校訂者は種々の写本をもとにテキストを編集している。このような事実を照らし合わせて、現代読者のために省略記号をつける措置をとったと考えられる。いずれにせよ写本では *i* のない形が存在することを今一度強調しておきたい。

次に語りと文体の観点から考えてみたい。物語はこの時代は聞くものであったので、聴衆の記憶に残るように工夫しなくてははいけない。あわせて詩という文体の持つ形式面での制約もある。そのため短い語のほうが扱いやすいという傾向があると言える。したがって長い語を短くしたり、直前の語と続けたりすることが起こると考えられる。聴衆にも短い語は母音字省略が起きても、耳からの理解するうえで支障にならなかった。定冠詞 *il* も直前の語と続けて読まれても、頻度が多く短い語であるので、聴衆には理解ができたと言える。

最後に韻律の観点から述べておく。音節数を把握する時にイタリア詩では前に母音があれば語間母音融合 (*sinalefe*) が生じる。母音字 *i* が書かれていても省略されていても韻律の点からは問題が生じにくい。事実今回の調査では母音の前でも *i* が省略される詩句もあればそうでない詩句もあり混在していた。

VI. 結語

今回の調査で明らかになった事実をまとめておく。

1. 母音字省略で前に置かれた語と分離しているのは定冠詞 *il* と前置詞 *in* である。写本 *Pluteo 41.28* では *il* の *i* のない形も確認できた。前置詞 *in* については *i* は書かれているが、点 (*punto*) が打たれていなかった³。

2. 定冠詞と前置詞以外に *i-* ではじまる語についても *i* を省略した形がある。写本でも *i* が書かれている形とない形が確認できた。

3. 物語を人々に聞かせる観点から考えると、この *i-* で始まる定冠詞と前置詞に関しては出現頻度が多く短音節であるので、母音を省略して読んでも耳から理解する支障にならなかったと考えられる。このことが多音節の *i-* で始まる語にも一部及んだと考えられる。

母音字省略を写本と物語を聞かせるというのふたつの観点から論じてきた。従来中世の詩（物語）の考察は声に出して聴衆に聞かせるという事実を無視して論じられてきた。この意味でテキストと統語論中心の見方に、これからは耳からの理解という観点を付け加える必要があると考える。

注

1. che 'l の che については品詞の区分を行っていない。なお表の数字は頻度を表す。
2. 写本調査にあたっては、日東学術振興財団から助成金を受けた。記して謝意を表したい。
3. 調査時間が限られていたので、前置詞 in の母音字 i のない形については次回の写本調査に委ねたい。

参考文献

- apRoberts, R.P., and Anna Bruni Seldis. *Giovanni Boccaccio Il Filostrato: Italian Text Edited by Vincenzo Pernicone: Translated with an Introduction by Robert P. apRoberts and Anna Bruni Seldis.* New York & London: Garland Publishing Inc, 1986.
- Beltrami, Pietro G. *Gli strumenti della poesia.* Bologna, Il Mulino, 2002.
- Branca, Vittore. *Boccaccio, Caccia di Diana Filostrato, a cura di Vittore Branca.* Milano: Arnold Mondadori Editore, 1990. [岡三郎（訳）『フィロストラト』東京：国文社、2004。]
- Griffin, N. E and Arthur Beckwith Myrick. *The Filostrato of Giovanni Boccaccio: A Translation with Parallel Text by Nathaniel Edward Griffin and Arthur Beckwith Myrick: With an Introduction by Nathaniel Edward Griffin.* New York: The University of Pennsylvania Press, 1978.
- Havelly, N.R. *Chaucer's Boccaccio: Sources for Troilus and the Knight's and Franklin's Tales.* Cambridge: D.S. Brewer, 1980.
- 池上嘉彦 『英詩の文法 語学的文体論』東京：研究社、1967。
- Nishimura, Masahito. *A Concordance to Filostrato. Grant-in-Aid for*

- General Scientific Research (C)*. Edited by Masahito Nishimura.
Programmed by Katsutoshi Nakamura. Toyohashi University of
Technology, 1996.
- Ong, W.J. *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. London
and New York, Routledge, 2008. [桜井直文・林正寛・糟谷啓介 (訳)
『声の文化と文字の文化』東京：藤原書店、1997。]
- 坂本鉄男 『現代イタリア語文法』東京：白水社、1989。
- Surdich, Luigi. *Giovanni Boccaccio, Filostrato, a cura di Luigi
Surdich con la collaborazione di Elena D'Anzieri e Federica Ferro*.
Milano: Gruppo Ugo Mursia Editore, 1990.
- 鈴木覺 「イタリア詩を読むために」『名古屋外国語大学外国学部紀要』第32号、名古屋
外国語大学、2007、425-48頁。
- Valle, V.D., and Patota, Giuseppe. *L'italiano-Biografia di una lingua*.
Milano, Sperling & Kupfer Editore S.p.A., 2006
[草皆伸子 (訳) 『イタリア語の歴史 俗ラテン語から現代まで』東京：白水社、
2008。]